

読解への道 Part2 ～連体修飾を探せ

はじめに

<A>昭和二十二年。津軽海峡の海上で、あっという間に多数の人命を呑みこんだ層雲丸沈没の大事故を起こした十号台風は、九月二十日の朝、函館から約百二十キロほどしか離れていないこの岩幌の町で、ボヤですんだはずの小さな火事から、全町三分の二までが焼失するという悲惨な大火事を惹き起こしている。

水上勉「飢餓海峡」より

ある時、カンダタは地獄の血の池の中で何かが光りながら下の方へ下りてくるのを見た。

芥川龍之介「蜘蛛の糸」より

<C>けさお店でお菓子を買った。

日本語能力試験4級「読解」問題より

<1>

マージャンを好む人は、与えられた情報に速やかに反応できる練習をしているわけで、脳の刺激という点では、マージャンほど優れたゲームはない。

筑波大学編「日本語表現文型中級Ⅱ」より

<2>

大切に大切に育てよう、私がこの子を守るんだ、そう心に誓った私はすべての愛情を娘に注ぎ込みました。

湊かなえ「告白」より

<3>

新しい生徒を見つけた大学教授は、週一回というインターバルを崩して、最近は三日おきにやってくる。

市川拓司「そのときは彼によろしく」より

<4>

先日の新聞に、嫌われる「四」と「九」の読み方を変えてはどうか、という読者の提案が載っていた。これに対する識者の意見は、読み方を変えるよりも、「四」が「死」、「九」が「苦」に通じるという考え方のほうを捨てたほうがいい、というものだった。

筑波大学編「日本語表現文型中級Ⅰ」より

< 5 >

わたしの失敗

わたしは先週友達のうちへ遊びに行きました。大阪駅で来た電車にすぐ乗りました。友達はうちの近くの駅で待っていると言いました。でも、わたしが乗った電車はその駅を通り過ぎてしまいました。それは特急電車でした。京都までどこにも止まりませんでした。わたしはもう一度大阪へ行く電車に乗りました。友達は駅で2時間待っていてくれました。嬉しかったです。

わたしは国で日本のふろ屋について本を読みました。とてもおもしろいと思いました。それで日本へ来てすぐふろ屋へ行きました。

わたしの本には写真があって、棚がたくさん並んでいる所で、みんな服を脱いでいました。わたしも棚が並んでいる所で服を脱いで、棚に服を入れました。それから中に入りました。そこにはもっと大きい棚が並んでいました。わたしは入り口で服を脱いで、靴を入れる所に服を入れてしまったのです。

「みんなの日本語読解篇」第 29 課より

< 6 >

六つになる親類の子どもが、去年の暮から東京へ来ている。この子に、東京と田舎とどちらがいいかと聞いてみたら、「田舎のほうがいい。」と言った。「どうして」と聞くと、「田舎の川にはエビがいるから。」と答えた。

この子どもが「エビ」と言ったのは、必ずしも動物学上のエビのことではない。エビのいる小川の流れ、森や山、それに川のほとりに咲く花、そういうようなもの全体をひっくりめた田舎の自然を象徴するエビなのだ。

私自身も、このエビのことを考えると、田舎が恋しくなる。しかし、それは現在の田舎ではなくて、過去の思い出の中にある田舎である。エビは今でもいるが、「子どもの私」は、もうそこにはいないからである。

筑波大学編「日本語表現文型中級Ⅱ」より

< 7 >

日本社会の家族的構造ということがよく言われる。これには、社会全体、あるいはその中の種々の集団を運命共同体として家族になぞらえて考える場合と、社会における人間関係を親一子一孫、兄一弟などのような血縁関係に擬して考える場合の両方があるように思われる。

筑波大学編「日本語表現文型中級Ⅱ」より